

現代日本における「市民」のあり方

みやした 凛
宮下 凛

(神奈川県／フェリス女学院高等学校二年)

はじめに

近頃、このような疑問を抱くようになってきた。――理系の方が、頭が良いのだろうか。私は、高校一年生の冬に進路選択をした。私の学校では、理系クラス、文系クラスといったものはないが、高校二年生から始まる選択授業で履修する教科を、この時期に選択する必要がある。数学は決して苦手なわけではないし、化学が楽しいから理系にしようか、小学校の頃から得意な社会科を活かして文系にしようか、といういろいろ悩み抜いた結果、文系の道に進むことを決めた。それに準じて、小論文や世界史などいわゆる文系の学部に進学する上で必要な授業の受講を決めた。

そして、高校二年生の春、よく友人から彼女たちが文系理系であるかを問わず「理系だと思った」と言われるようになってきた。その理由を聞くと返ってくる答えは主に「数学ができないわけではないでしょ?」「頭が良いから」などである。親戚からも、「理系にすれば良かったのに」と言われたりもした。褒められていているものの、理系の方が頭が良いと暗に言われているような気がして、文系の私としてはなんとなくやもやとする日々が続いた。

このような理系偏重の思考は、そもそも理系、文系で分かれるというシステムがなければ生まれなかったと考えられる。しかし、私は文理に分かれることによる良さも、日々実感している。理系の科目が減った分、

より自分の興味のある分野の学びを深めることができるようになったのだ。まだ文理に分かれていない高校一年生の頃は、テスト前になると科目数が多いために時間がなく、次の日の教科を深く理解せずに、丸覚えしてしまうことがあった。それに対して、文理に分かれてからは、一教科あたりにかけることができる労力や時間が格段に増えた。そうすることで、ただテスト勉強に追われるだけでなく、よりディープに学習することができるようになった。世界史で古代エジプト史を習った際には、博物館に行き実際にエジプト時代の遺跡を見たり、現代文で扱った作品の著者の他の本を読んだりというように。この充実した学問を深める時間は、文理に分かれなければ得ることはできなかった。

このように、理系、文系に分かれるシステムによって、弊害を被ることもあれば、恩恵を得ることもある。本稿では、文理を区別することによる長所と短所を整理した上で、そもそも人間を理系、文系に分ける必要があるのか、考えていきたい。

第一章 教育現場における理系、文系の現状

理系、文系の区別をつけることによるメ

リット、デメリットを考える前に、そもそも、文理の区別をつけられるようになったのはいつのことなのであろうか。現代において本格的に文理選択をするのは、大学受験のときであるため、まずは日本の大学の歴史について振り返る。日本に西洋の人文社会科学や自然科学が導入されるのは一九世紀後半のことであった。当時の東アジアに、西洋の、学者一人一人が一つの分野の専門家となり、他の分野は修めないう文化はなかった。そのため、様々な分野に細分化された学問に出会ったことは、明治時代の日本にとって驚くべきことだった。学者達の間では学問分類について、様々な議論が続いたが、やがて学問を文理に分けるという考え方が世間に定着していくようになる。一八七二年には学制が公布され、将来作られる大学に法・医・数理・理・化学の各学科を設けることが示された。そして、一九一〇年代には、全ての分野を理系、文系の二種類に分類されるようになり、中等教育について定めた第二次・高等学校令の第八条には、「高等学校高等科ヲ分チテ文科及理科トス」との文言が入った。これ以降、大学入学試験の準備段階で、文系志望・理系志望に二分する方式が定着してい

くようになったのである。

文理の区別をつけることによるメリットは、専門家の育成がしやすいことだ。私も実感しているように、文理の区別をつけることでより深く専門分野を学ぶことができる。一九八〇年代には、日米貿易摩擦を背景に「科学技術立国」が叫ばれ、一九九〇年代以降から、科学技術基本計画の下で五カ年ずつ三十兆円ほどが自然科学・技術に投下される体制が確立した。そして、日本の基礎科学は何度もノーベル賞を取るような水準に達した。これは、当時既に理系と文系の区別をつける考え方が定着しており、専門分野の研究に専念出来たという背景があつてこそのことだと思われる。

このように、理系と文系に分かれ様々な学問の専門化が進行することによって、特に科学技術は大きく発展した。そのため私は、理系、文系の枠組みは、教育の場においてとても有意義であり、今後も文理に分ける必要性があると考え。その理由として、大学は専門家育成の役割を担っているということが挙げられる。理系、文系の区別をつけずに、全員が広く多種多様な分野を勉強しているようでは、現代社会に必要不可欠な専門家は誕生し得ないのだ。も

ちろん文理を横断する学問の分野は増え続けている中で、あらゆる分野に通じている人材が重宝されていることは間違いない。実際、専門分野が過度に細分化されていることで、学生に社会を生き抜く力を身につけさせる教育が不十分なのではないかという問題意識を持ち始め、理系、文系の枠にとられない教養教育を行っている大学が増えている。

しかし、だからといって専門家が今すぐ無用になるわけではない。専門知識を持ったスペシャリストはこれからもこれまでも社会において必要な存在であり、スペシャリストを育成するためには、その専門分野に関連した科目を深く学ばなければならぬ。時として様々な教科を広く学んでいると、専門的知識の習得がおろそかになってしまう。理系、文系に分かれることは、専門家を輩出する上で効率的なシステムなのだ。

第二章 理系偏重思想が生まれた背景とそこから見える問題

本来、理系、文系の区別をつけるのは教育現場のみである。しかし、社会においても文理の枠に固執する人は多く、その結果、

偏見や差別が生み出されている。理系偏重の傾向はその最たるものだろう。世間では、「理系脳の育て方」「文系頭のまま理系に合格する方法」といった本が数多く出版されていたり、また、リクルートホールディングスのR25編集部とアイリサーチの調査（注1）によると、未就学児の子どもを持つ二十〜三十代の父親二〇〇人のうち、約七四％の人が自分の子供に進んで欲しい大学の専攻は理系である、と答えた。文系の端くれとして、世間のそのような考え方に腹立ちを覚えていたが、実は、私も文系よりも理系の方に「頭が良い」イメージを持っていた。もちろん、文系理系問わず、優秀な人は優秀であることはわかっていた。しかし、進路選択の際、理系に進まないことになぜか「もったいなさ」を最後まで感じていたのである。では、この価値観を現代日本に生み出した背景は何だろうか。本稿では四つの要素を理由として挙げたい。

一つ目は、理系の科目的特徴である。国語や社会は単元ごとの結びつきが比較的強くないため、学び直すことが簡単であるのに対して、数学や理科は単元同士の関連性がとても強い教科だ。理系科目の勉強についていけなくなったときは、きちんとわ

かるところまで戻って学習しなおす必要がある。しかし、学校教育において同じことを復習する機会はありません。そのため、理系の科目は得意不得意の差が広がりやすく、特に数学は気がついたら差を取り戻すのが困難になってしまふと考えられる。このように、理系の科目は他の教科に比べて「別格」であるのだ。私の周りで苦手科目を理由に進路を決める子の中では、数学ができないから文系、とする友人が一番多かった。

二つ目は、就職、年収に対するイメージである。理系の方が就職に有利であるという声が世間では囁かれている。第一章で示した調査において自分自身は文系だが、子供には理系に進んで欲しい（注1）と答えた父親の意見も、「就職に有利だと思うから」「専門性のある資格をとってほしいから」「文系の仕事は理系でもできるが、逆は無理だから」などであった。就職に有利、というのは個人の感想という側面もあり、具体的な数値で表すことができるものではないが、そのような意見が出る理由として、理系は一般企業に専門知識を活かして就職しやすいということが挙げられる。一般企業には総合職と研究職、技術職などが存在

し、研究職と技術職は理系だからこそ就くことができる職種だ。そのことが、理系の仕事を文系がこなすことはできない、という意見の理由であると考えられる。年収に関しては、独立行政法人経済産業研究所の調査（注2）を紹介したい。これによると、男性の場合、文系出身者の所得平均値が約五五六万円、理系出身者は約六〇一万円となっており、理系出身者の方が高い。この結果は、具体的な数値は周知されていないにしても、世間一般的によく知られたものであり、誰しも一回は聞いたことがあるのではないだろうか。私自身耳にしたことは何度かあるし、親戚から理系進学を勧められたときに、理由として言われたことは社会人になってからの年収のことであった。年収が全てではないが、価値判断においてお金が重要なものさしであることは否めない。年収、就職は共に人生において重要な要素である。そのため、理系に進めば就職が有利だ、年収も高いという考えは、理系の方が文系よりも偉い、すごい、というイメージを人々に与えると思われる。

三つ目は、科学へのイメージである。科学技術の発展により、人類の生活は便利に、そして豊かになってきた。電気や自動車、

医療技術など、近代社会において今や必要不可欠となった発明・技術は数えきれない。そして、この功績は数多くの科学者の努力によって作られたものであることは周知の事実である。実際に、戦争が近づくと理工系重視の政策が助長されるようになった。このこともまた、世間の理系と文系に対する見方の差を生んだ。例えば、同じ「研究者」という職業でも、文系の研究者と理系の研究者に対するイメージは異なる。先ほども述べたように、人類は科学による恩恵を受けてきた。そのため、人々は、科学技術を進化させてくれる理系の研究者を、自分たちの生活を豊かにする一種の恩人として捉えるだろう。彼らの研究結果は、直接自分たちの生活にいい影響を及ぼしてくれるのだから。それに対して、文系の研究者へのイメージはどうだろうか。彼らの研究結果は、私たちの生活に必要不可欠のものではない。歴史や文学などは役に立つのかという議論が度々起こっていることからわかるように、文系研究者の研究に価値を見出している人は少ない。個人的には、歴史や文学は人生を豊かにしてくれると思うのだが、生きる上で必要ないと切り捨ててしまう人もいる。政治や経済をテーマにし

ている研究者たちの成果も、科学技術と比べてたら実感する機会は少ない。

最後に、国の方針の影響である。二〇一五年に文部科学省は、「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」の通知を出した。この通知の中では、全ての組織を見直しの対象としつつ、「特に教員養成系学部・大学院 人文社会科学系学部・大学院については、十八歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むよう努めることとする」とした。このことに対して、世間では、「人文社会科学系学部・大学院を廃止し、社会的要請の高い『自然科学系』分野に転換すべき」というメッセージだ。「文部科学省は人文社会科学系の学問は重要ではないとして、すぐに役立つ実学のみを重視しようとしている」「文部科学省は、国立大学に人文社会科学系の学問は不要と考えている」といった声が上がリ、文部科学省に非難の目を向けた。文部科学省は、「人文社会科学系などの特定の学問分野を軽視したり、すぐに役に立つ実学のみを重視したりはしない」と弁明したが、果たし

て国の意図がどれだけの人に正しく伝わったものなのか甚だ疑問である。文科省の意図通りでなかったとしても、多くの人々が文系軽視としてこの通達を捉えてしまったのは事実である。

これまで理系偏重の傾向の背景を明らかにしたが、現代日本には性別による文理の差別も存在する。男女で文理の適性が異なると考えている人は少なくない。実際日本では理工系に進む女性と人文科学系に進む男性が少ない傾向にあり、その希少性からか二〇一一年頃から理系に進学した女性のことを、特別に「リケジョ」と呼ぶようになった。本当に男女で生物学的な向き不向きがあるのかという議論はさておき、性別による差別的思想を持つ周囲の人に、進路についてとやかくいわれたり、偏見の目で見られて戸惑ったりする体験をした人々がいるということは問題だ。実際に「私は文学に興味があったが、親に就職を考えれば法か経済に行けといわれた」（男子学生）、「理系に進んだが、女の子なのに変わっているといわれた」という体験談がある（注3）。このような偏見によって懸念されることは、自らの可能性を努力もしないうちから摘み取ってしまうことである。他人の勝手

な偏見、例えば「成績が良いなら理系に進みなさい」「女の子で理系は珍しい」「男の子なのに文学部？」といったものに自らの願望を制限されることほど悲しいことはない。また、他人から圧力をかけられるばかりでなく、自分の可能性を「自分自身」で狭めている場合もある。「理系の方が頭が良い」「女性は理系に向いていない」という暗黙のメッセージは社会を通して人々の意識にすり込まれてしまった。そんな世間の中で、自分の好きな道に進むことは容易ではない。見栄を張って理系に進学したり、男性で文系は珍しいから理系の道に進もうと思ってしまったりと、潜在的な意識に人々は知らぬ間に支配されているのではないだろうか。

第三章「市民」として考える理系、文系

専門教育を受けるときにこそ文理に分かれる意義があるのにも関わらず、我々は日常生活においても理系、文系の枠に縛られている。また、文理関連の偏見に、苦しんでいる。偏見や他人から貼られたレッテルによって自分の可能性を小さく制限していくと、やがて視野が狭くなっていき、自身も偏見を持つようになってしまう。そ

して、自分の偏見により、後世の誰かが自身の殻を小さく捉えてしまい……というように負の連鎖を辿ることとなる。

理系か文系、どちらからしか物事を判断できない人々の視野の狭さは、偏見の原因となるだけでなく、社会に属する一人の市民として責任を果たせないことにも繋がる。もし、自分の専門分野以外のことに何も関心がなく、知識が全くなかったらどうなるだろうか。文系だからといって馴染みのない科学っぽい言葉に惑わされ、詐欺まがいのニセ科学商品を買ってしまうかもしれない。理系だからといって世界の歴史を知らず、海外で取り返しのつかない発言をしてしまうかもしれない。このような行動はお世辞にも責任感のあるものとはいえない。どんなときにでも理系、文系という枠にとらわれていると、視野が狭くなり、市民としての役割を果たせなくなっていくのである。

ここで注意したいのは、文理に分かれること自体が問題なのではなく、理系、文系の枠にとらわれすぎることが問題であるということだ。文理の区別をつけることは専門家育成の上でとても効率的なシステムであるし、今後も社会にこの文化は残り続け

るだろう。しかし、誰もが通る教育現場に文理のシステムが存在しているからこそ、我々は一人の市民としてどのような思考回路を持ち、どのような人材を目指すべきなのか、理系、文系という区別をどうとらえるべきなのか、今一度考えるべきときに来ている。

私が考える一人の市民としての理想像は、総合的な視野を持った「ジェネラリスト」である。「ジェネラリスト」とはスペシャリスト（専門家）の対義語として使われる言葉で、幅広い分野についての知識や技術、経験を持つ人のことを指す。

我々は一人の市民として、社会に属している。そんな私たちが住む社会は、ときに公害を引き起こすこともあるし、不景気に苦しめられることもある。その責任はそれぞれの専門家だけにあるのだろうか。私はそうは思わない。世の中で起きたことは少なからず市民全員が関係のあることであり、全ての事柄に最終的な判断を下すのは一般市民であるからだ。特に、現在はSNSの発達により、市民一人一人が強い力を持つようになった。いくら専門家が賢人であっても、それを総合的に判断する市民が無知であつたら、世界は破滅するかもしれ

ない。

また、暴走した世論を専門家が食い止めることは難しい。圧倒的な数の差が存在するからである。二〇一七年六月に日本原子力研究開発機構大洗研究開発センターで作業員五人が内部被曝する事故が発生した際、ネット上には、「専門用語が多く、何が起きているのかいまいちよくわからない」「全員にわかる言葉で報道するべき」などというコメントが多数投稿されていた。しかし、実際は物理の基礎程度の知識があれば理解できる内容であり、高校生の私でも概要を把握することは簡単であった。そのときに私は、市民が無知であることの恐ろしさを感じた。

理系、文系に分かれることは人類が知性を育む上で有効な手段であったと思うし、これからも効率的なシステムであり続けるだろう。しかし、理系、文系に分かれているのをいいことに、一人の市民として総合的な視野を持つて意欲的に学習することを怠ってはならないのだ。広い範囲の知識を得るためには、大人になってから準備するようでは遅い。学生、特にまだ文理に分かれていない義務教育のうちから満遍なく全ての教科の造詣を深めるべきである。どう

しても、受験を経験すると入学試験対策では勉強しなかった教科を、自分の人生から排除してしまう人がいるように思える。高校二年生になり、理系、文系に分かれたため、「もう数学とはおさらばだ」「世界史は一生やらない」などと語る友人がそれなりにいた。

しかし、受験で使わなかった科目＝不要な教科ではない。目先の受験にばかり目を奪われず、次世代を担っていく「未来の大人」「市民」として貪欲に全ての分野を学習していきたい。そして、私と同世代の中学生、高校生全員がそのような学習態度をとることを願う。

日常のちよつとした不満から始まった理系、文系についての本稿の考察だが、専門教育成のためある程度文理の区別をつけることは必要、しかし、社会への責任がある一人の市民としては、理系、文系の垣根を超えた幅広い視野を持つべきであるという結論へ至った。理系、文系の枠にとらわれすぎると、自分の可能性を、色々と試行錯誤する前から小さく捉えてしまう可能性がある。この影響は、一つの人生の分岐点にある高校生にとっては警戒するべきものである。私自身、周囲の言葉で自分の進みた

い道を見失いそうになった。一人でも多くの高校生が、偏見や勝手なレッテルを気にすることなく進路選択をできるよう、一日でも早く偏見のない、幅広い視野を持った市民によって社会が構成されることを願う。私は、大学進学を考えているが、スペシャリストであると同時に、理系、文系の枠にとられない幅広い視野を持ったジェネラリストでもありたい。そして、社会に對して責任を持った人間でありたいと思う。

〈注〉

〈注1〉J-CAST ニュース「父親の7割、子どもは『理系に進んでほしい』『文系に進学は後悔すべきことなのか』」
<https://www.j-cast.com/2016/03/01260086.html?ref=all>
(二〇一八年七月二十日)

〈注2〉独立行政法人経済産業研究所「理系出身者と文系出身者の年収比較—JHPSデータに基づく分析結果—」
浦坂純子・西村和雄・平田純一・八木 匡 <https://www.rieti.go.jp/publications/summary/11030010.html> (二〇一八年八月二十日)

〔注3〕 隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』（星海社新書）、星海社、二〇一八年、一五七ページ

〈参考文献〉

相澤益男『大学進化論 世界に開かれた東京工業大学の改革』日経BP出版センター、二〇〇八年
隠岐さや香『文系と理系はなぜ分かれたのか』（星海社新書）星海社、二〇一八年
関東学院大学法学研究所『リベラルアーツのすすめ―法学部で学ぶ―』、関東学院大学出版会、二〇一三年
岸田一隆『3つの循環と文明論の科学 人類の未来を大切に思うあなたのためのリベラルアーツ』、エネルギーフォーラム、二〇一四年
齋藤孝『教養力 心を支え、背骨になる力』、さくら舎、二〇一四年
志村史夫『文系？ 理系？ 人生を豊かにするヒント』、ちくまプリマー新書、二〇〇九年
菅野恵理子『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる 21世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育』、アルテスパブリッシング、二〇一五年

高橋義人・京都大学大学院「人環フォーラム」編集委員会編著、『教養のコンチェルト 新しい人間学のために』、人文書館、二〇一一年

竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』、中央公論社、二〇〇三年
高浜行人『文系改革』揺れる国立大、『朝日新聞』、二〇一五年九月二十二日朝刊、十四版三六面

中本高道『異分野と楽しめる感性を』、『朝日新聞』朝刊、二〇一八年七月十八日、十三版三一面

石臥薫子・高橋有紀・鳴澤大編『ハイブリッドな人の働き方』『AERA』二〇一五年四月十三日号

瀬川茂子編『数学でさえない＝負け』の記憶がバネになる文系』『AERA』二〇一五年四月十三日号

高橋有紀編『問題付き！ 算数と国語は同時に伸ばせる』『AERA』二〇一五年四月十三日号

鳴澤大編『理系は経営が苦手なのか』『AERA』二〇一五年四月十三日号
古谷ゆう子『リケジョの肖像①希少女子を生かす職場』『AERA』二〇一五年四月十三日号

福岡伸一『文系と理系の溝が成果の共有を阻む』『AERA』二〇一五年四月十三日号
学校法人フェリス女学院『女子教育の社会的意義とフェリスが守るべき文化』
<http://www.ferris.jp/allferris/special/special05.html>（二〇一八年八月二十日）

文部科学省『国立大学法人等の中期目標及び中計画の素案に対する所要の措置について』（平成二十七年十二月一日27文科高第820号文部科学大臣通知）
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_jcsFiles/afieldfile/2016/04/07/1369085_01.pdf（二〇一八年八月十九日）

東京工業大学、『私たちのヴィジョン リベラルアーツ研究教育院について』
https://www.titech.ac.jp/education/stories/liberal_arts_2015.html（二〇一八年八月二十二日）

独立行政法人経済産業研究所、『理系出身者と文系出身者の年収比較』JHPSデータに基づく分析結果、浦坂純子・西村和雄・平田純一・八木匡

<https://www.rieti.go.jp/publications/summary/11030010.html>（二〇一八年八月二十日）